

Stereo Sound

特集 感動が鳴るサウンドシステム

「組合せ」と「セッティング」で追求するオーディオの愉悦

連載 あなたの部屋のベストサウンド——実測篇その1 音楽のある場所 村上春樹

SESSIONS, LIVE! 「ぼくらは音が命だからね」渡辺貞夫 meets 菅原正二

SS流オーディオケーブル放談



Stereo Sound

2003

季刊ステレオサウンド
夏号

No. 147

NEW AUDIO DIALOGUE

巻頭対談

菅野冲彦／柳沢功力

「感じる」がオーディオのキーワードだ

特集

「組合せ」と「セッティング」で追求するオーディオの愉悅

和田博巳	予算100万円
三浦孝仁	予算150万円(2ch)／250万円(マルチch)
柳沢功力	予算250万円
櫻井卓	予算300万円
傅 信幸	予算400万円
柳沢功力	予算500万円
菅野冲彦	予算1000万円

連載

あなたの部屋のベストサウンド

いい音のための新セッティング術

実測篇 6畳間は理想的な音響特性を示した

石井伸一郎

SS流オーディオケーブル放談

上杉佳郎／三浦孝仁／柳沢功力

特集

「感動」 サウンド システム

が鳴る

- 和田博巳——予算100万円
三浦孝仁——予算150万円 (2ch)
250万円 (マルチch)
柳沢功力——予算250万円
予算500万円
櫻井卓——予算300万円
傅 信幸——予算400万円
菅野沖彦——予算1000万円

「組合せ」と「セッティング」で
追求するオーディオの愉悅

予算 **150**万円以内 (2ch)

予算 **250**万円以内 (マルチch)

2ch & マルチchで先鋭的なハイエンドオーディオの音を狙う

LOUDSPEAKER(フロント2ch)	B&W Signature 805	¥560,000 (ペア)
LOUDSPEAKER(リア2ch)	B&W Nautilus 805	¥300,000 (ペア)
SPEAKER STAND	アコースティック・リヴァイヴ RSS805	¥190,000 (ペア)×2
SUB WOOFER	ビクター SX-DW7	¥135,000
SACD/CD PLAYER	マランツ SA17S1	¥180,000
PREAMPLIFIER	ソニー TA-P9000ES オープン価格(実勢¥90,000前後)	
POWER AMPLIFIER	フライングモール DAD-M1	¥40,000×4

システム価格 **¥1,100,000/ ¥1,805,000**

オプション (2ch) (マルチch)

AUDIO RACK タオック HT3 ¥53,000



空間に楽器がピシッと立体的に定位。
マルチch再生時の広大な音場は感動的だ

三浦孝仁

特集

「感動」が鳴る
サウンドシステム

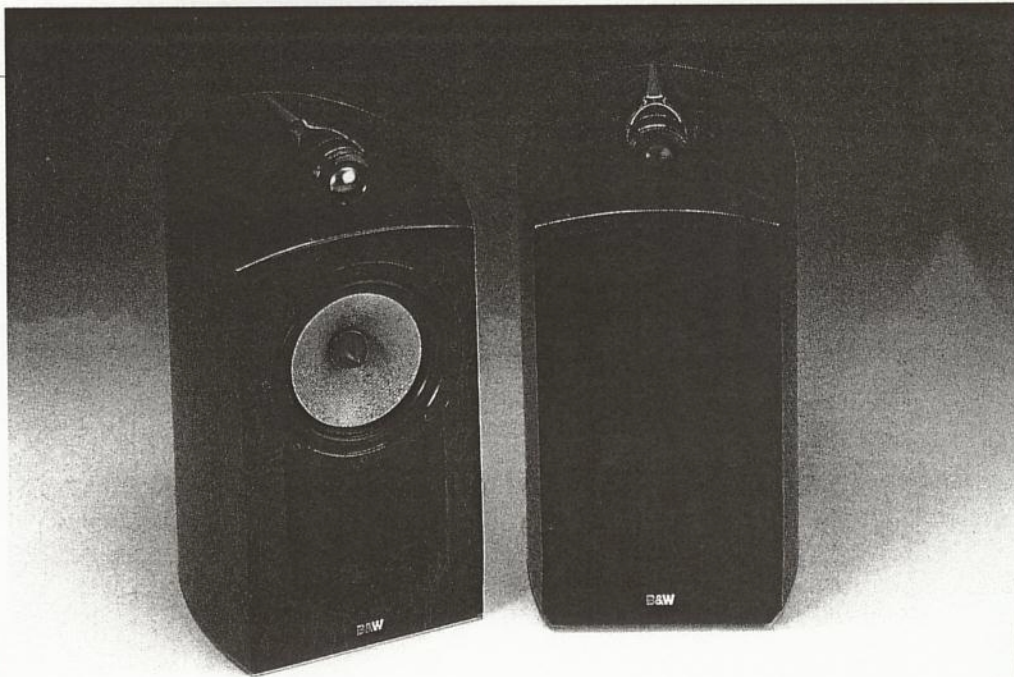
LOUDSPEAKER (フロント2ch)

B&W

Signature 805

¥ 560,000(ペア)

●型式:2 ウェイ2 スピーカー・バスレフ型●使用ユニット:ウーファー・16.5cmコーン型、トウィーター・2.5cmドーム型●クロスオーバー周波数:4kHz●インピーダンス:8Ω●感度:88dB/2.83V/m●寸法/重量:W238×H415×D344mm/9kg●問合せ先:日本マランツ(株)お客様ご相談センター☎03(3719)3481



B & W

このうえなく緻密でリアリティに溢れる、先鋭的なハイエンドオーディオの音。これが、私が狙った組合せの基本コンセプトである。

微妙なセッティング変更にも敏感に反応し、ケーブルやアクセサリーによる音の変化も明確に聴き分けられる……。ディスクに刻まれた音楽の躍動感や、音数が豊富で複雑に絡み合っただけの音のテクスチャを写實的に描き、音楽を真剣に聴くことが心底愉しく思える音を出したかった。

音の方向性は、圧倒的な解像力の追求と音像イメージの精密なフォーカシング。加えて、奥行き感に優れた広大な音場空間という、まさに私が追い求めている音世界そのもの。しかも、ステレオフォニックの音とピュアオーディオ・マルチチャンネルを、高い次元で両立することも念頭に置いている。ピュアオーディオ・マルチチャンネルに否定的な意見が少なくないことは、私自身も肌で感じている。だが、好き嫌いの問題は別にしても、食わず嫌いの意見のなんと多いことか……。

そこで得られるものが聴き手を包み込む音場だけだと思っているなら、偏見かつ大いなる誤解である。私が2年半以上にわたりピュアオーディオ・マルチチャンネル再生を実践して得たのは、解像力の向上による音楽表現の新境地が存在すること。発音源であるスピーカーが2台から5台に増えることでステレオ・リミックスの段階で重なり合った音が不明瞭になるマスキング現象から逃れることができ、ヴォーカルや楽器の表情と音場空間が生々しく再現される。それがピュアオーディオ・マルチチャンネルの醍醐味なのである。とはいっても、最も重要なことは、言うまでもなくステレオ再生のクオリティ。私は、SACDの魅力と優位性を明確に提示するだけでなく、聴き慣れたC

Dからも新たな発見をもたらす新鮮な音を求めた。また、低域方向の安定感を高めて、小型機が陥りやすい腰高な音調バランスにならないよう配慮してある。編集部からの要請はシステム合計額をステレオで150万円以内、マルチチャンネルで250万円以内に抑えることだった。

全ch同一ではなく、双子の兄弟をフロントとリアに使い分ける

最初に決めたのはメインのスピーカーシステム。私は迷うことなく、英国B&Wのシグネチャー805を選択した。徹底した理詰めの設計と入念なりスニングによって到達した、音楽ジャンルを問わない最高峰のスピーカーのひとつであり、自分の狙いにピッタリと符合する音を得られると確信したのである。ボンと置いて鳴らしただけでも音離れがよく情報量の豊かな美音をもたらす優秀機であるが、組み合わせる機器の選択とチューニングにより、シグネチャー805の魅力を十二分に引き出すことができたと思っている。

主軸となるフロントスピーカーの次は、リアスピーカーである。ピュアオーディオ・マルチチャンネルの理想型は、すべて同じスピーカーで揃えることだ。だが、私はあえて弟分であるノーチラス805を選ぶ。音の鮮明さや密度の高さは明らかにシグネチャー805のほうが勝っているが、全チャンネルに使うのは贅沢すぎる……。幸いにも、両機種は同一フォルムで設計思想も共通という双子の兄弟のような関係。ただし、フロントの左右がシグネチャー805でセンターをノーチラス805にすると、音調の統一感が破綻して台無しになってしまう。ノーチラス805はリアスピーカーに限った登用なのである。

次に決めたのは、マルチチャンネル再生に対応した

プリアンプだ。ソニーのTA-P9000ESは、内
部はオペアンプ等をいっさい使わない簡潔なディスクリート回路で構成され、ES仕様の大型電源トランスを搭載するビュアオーディオ志向のアナログ・プリアンプ。加えて、操作性が良好という力作である。こんな逸材を使わない手はない。入力がシングルエンド2系統(バイパス入力は除く)だけで出力は1系統のみ、電源ケーブルが直出しで交換不可能というあたりが寂しいが、割り切つて考えよう。本機は超高級機のようなゴージャスな音質を有しているわけではない。だが、シンプルで回路らしいフレッシュユースとスピード感を武器にしたストレートな音は、この組合せにもってこいだ。私が特に気に入っているのは、透明度の高い音場空間。ノイズフロアーが低く澄んだ空気感が得られているので、音像イメージが小気味よく定まる。

「サミング機能」を搭載する マルチch対応 SACDプレーヤー

送り出しソース機器は、マルチチャンネル対応のSACD/CDプレーヤーである。ここでは定評あるソニーとマランツを用意。優れた音質であることはもちろん、センタースピーカーを使わないマルチチャンネル再生に必要な、センター成分を左右フロントに割り当てる「サミング機能」を備えている。ソニーSCD-XA777ESは多彩なサミング機能をすべてデジタル領域で処理しているのが特徴だ。マランツのSA17S1はセン

ター成分をDAC出力の直後に左右フロントにサミングできる、アナログ領域によるファントムセンターというサミング回路を備えている。

ステレオ出力を重視した設計のマルチチャンネル対応機は少なくない。それはそれで結構なのだが、マルチチャンネルの音を聴くとエネルギーバランスやスピーカー間のつながりに違和感を覚えることがある。その点、この2機種は全チャンネルがまったく同等条件の回路構成である。ステレオ再生の場合、SCD-XA777ESは3チャンネル分の出力回路を合成並列駆動して出力。SA17S1の場合はフロントL

／Rからの出力になり、他の4回路は使わずに遊ばせている。

最も候補が多くなったのはパワーアンプだ。機種選択における絶対条件は、モノブロック仕様。モノラルアンプに限定したのは、大音量再生の時も他チャンネルの影響を受けない専用電源部を持つから。理論的に最良のセパレーションが獲得できる形態ということも選択理由である。

駆動対象がコンパクト機であることから、パワーアンプは小型高性能タイプから選んでいる。メラクス(ドイツ)SCENIOIとステラヴォックス(スイ



LOUDSPEAKER (リア2ch)

B&W Nautilus 805 ¥300,000(ペア)

●型式:2ウェイ2スピーカー・バスレフ型 ●使用ユニット:ウーファー・16.5cmコーン型、トウィーター・2.5cmドーム型 ●クロスオーバー周波数:3kHz ●インピーダンス:8Ω ●感度:88dB/2.83V/m
●寸法/重量:W238×H415×D344mm/9kg ●備考:写真のスタンドは別売 ●問合せ先:日本マランツ(株)お客様相談センター ☎03(3719)3481

B & W



MARANTZ

SACD/CD PLAYER

マランツ SA17S1

¥180,000

●再生可能ディスク:SACDステレオ、SACDマルチチャンネル、CD、CD-R、CD-RW ●アナログ6ch出力:アンバランス1系統 ●デジタル出力(SACD除く):同軸1系統、光1系統 ●寸法/重量:W458×H110×D392mm/12kg ●問合せ先:日本マランツ(株)お客様ご相談センター ☎03(3719)3481

テラヴォックスと同傾向の音であり、事前に比較試聴したところPW1のほうが好ましい結果を得たので、最終的には候補には入れなかった。これらのアンプはいずれも自分で知っている製品とはいえ、実のところシグネチュア805と組み合わせて聴く機会が一度もなかった。パワーアンプの候補が多くなってしまったのはそのためだ。

アクティブサブウーファーはマルチチャンネル再生のために用意。固有の音色感を最小限に抑える目的で、ポートを備えたバスレフレックス方式を避けている。音楽再生用としての音質にこだわり、英国B&WのASWCDMとピクチャーのSX・DW7が候補。いずれも密閉型である。

ステレオ再生を最優先し、センターなしの4・1chシステムに

試聴開始。最初は基本セッティングを確立したうえで、スピーカーの構成とプレヤーを決める。この段階ではシグネチュア805をセンターにも使う3本構成か、それともセンターレスの2本構成にするかで迷っていた。パワーアンプはメラクスのSCENIO1を5台用意し、プレヤーはソニーSCD・XA777ESを仮設置。ラインケーブルはオーディオクラフトのKX150(1・5m)、スピーカーケーブルも同社SLX(5m)である。スピーカースタンドはアコ

ーステイック・リヴァイブのRSS604(高さ60cm)をシグネチュア805に、同じ高さのRSS805をノーチラス805に使う。スピーカーとスタンドのあいだに薄いフェルトの小片4枚を四隅のコーナーに挿み、床面とはスパイク接地だ。スピーカーの位置関係はITU-R勧告に従い、自宅から持ち込んだ米国製のレーザーポイント装置で厳密に角度と方向を測定したうえ、等距離セッティング。私と左右フロントのスピーカーはシビアな正三角形の位置関係である。

まずはステレオ/マルチチャンネル収録のSACDを数枚使って試聴。試聴を初めてすぐに判明したのは、ステレオ再生の時はセンターの存在がシャープな音像定位の妨げになり、視覚的にも煩わしく感じられること。ピシッと中央に定位するヴォーカル音像とセンタースピーカーが同一線上に存在するため、ステレオ再生なのにセンタースピーカーが鳴っているような錯覚に陥ってしまうし、音場の立体的な拡がりも不自然な展開なのが判る。ただし、マルチチャンネル再生を充実させるなら、やはり前方にシグネチュア805を3本設置すべきだろう。楽器やヴォーカルなどの直接音をセンターチャンネルに割り当てたディスクを聴くと、訴求力の点でサミング効果の限界が見え隠れする……。そこで、ステレオ再生の時はセンタースピーカーを邪魔にならない場所に移動することを考えてみたが、スタンド込みではかなりの重量があり、とても現実的な解決策ではない。前述したとおりステレオ再生の音が最優先なので、センターを使わない2本+2本という構成でいく。

次に行なったプレヤーの選択も、短時間で決着してしまった。ここではステレオの音質とサミング機能を使ったマルチチャンネルの音質が試聴のポイントだ。ソニーは重厚感ある音の佇まいが持ち味で、リフ

ス)PW1、そしてライティングモールド(DAD・MIが候補である。最初はジョブ(スイス)Job300を含む4機種を考えたのだが、Job300はス

アレンス機らしい本格的な音の表情である。だが、デジタル領域でサミングしたマルチチャンネルの音は音場感が狭まってしまい、透明感が失われる……。この



SONY

PREAMPLIFIER

ソニー

TA-P9000ES

オープン価格(実勢9万円前後)

●入力感度/インピーダンス:150mV/20kΩ●アナログ6ch入力:アンバランス2系統、アンバランス(バイパス)1系統●アナログ2ch入力:アンバランス(バイパス)1系統●アナログ6ch出力:アンバランス1系統●寸法/重量:W430×H124×D388mm/9.6kg●問合せ先:ソニー(株)お客様ご相談センター ☎0570-00-3311

POWER AMPLIFIER

フライングモール

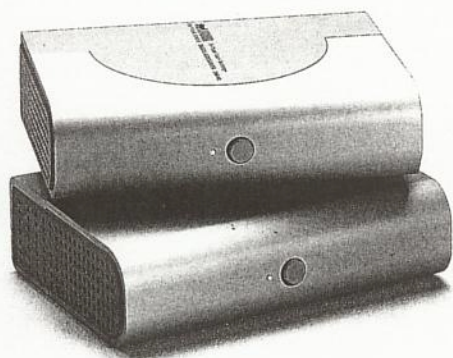
DAD-M1 ¥40,000(1台)

●出力:100W(8Ω)、160W(4Ω)●入力感度/インピーダンス:1V/10kΩ●寸法/重量:W152×H41×D121mm/730g●問合せ先:(株)フライングモール ☎053(416)1720 URL:www.flyingmole.co.jp

状態ではステレオ再生との品質差がありすぎる。いっぽう、マランツは繊細かつ爽やかな音色が特徴。ファントムセンターというアナログ領域によるサミング機能は、音の鮮度感をほとんど損なわず、音場感も透明度を失っていない。このクオリティなら、4・1chによるピュアオーディオ・マルチチャンネルを不満なく楽しむことができる。音のバランスについては今後のチューニングで調整できそうなので、プレーヤーはマランツを使うことに決めた。

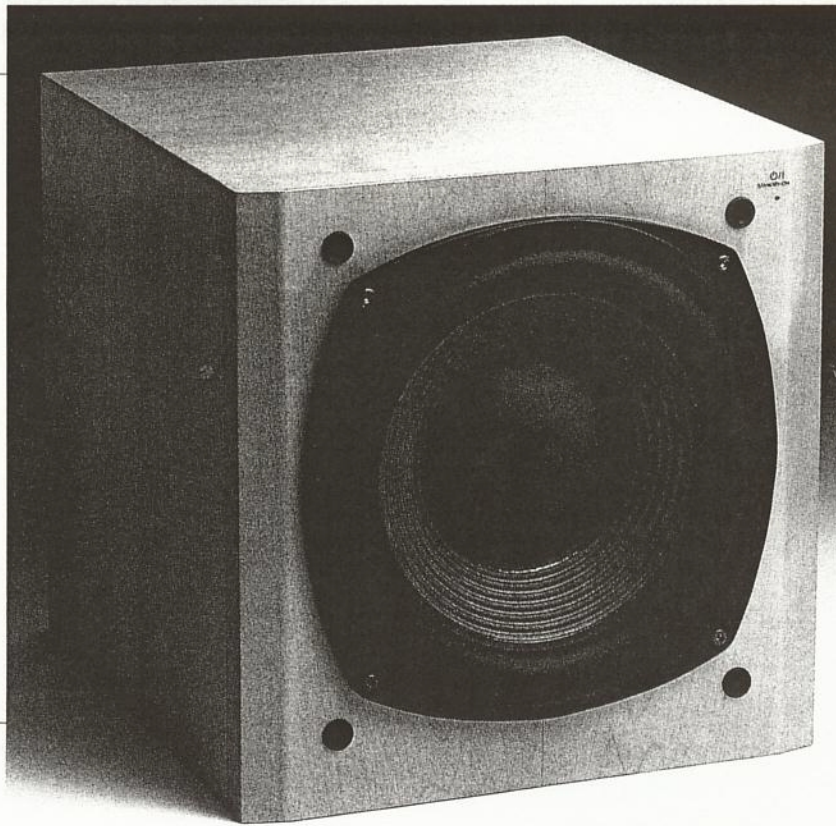
**フライングモールが聴かせる
切れ込み鋭く、かつ暖かみのある
ヴィヴィッドな表現にわが耳を疑った**

大いに楽しめたのがパワーアンプを選ぶ作業。ここでは製品に付属する電源ケーブルを使い、電源の極性を揃えて聴く。プレーヤーをソニーからマランツのSA17S1に交換した以外は、最初のセッティング環境と同じである。プログラムソースは2chに限定。クラシックの「ステレオサウンド・リファレンス・レコード/ドイツグラモフォン・ベスト・レコーディング」(以下、「DGG」と、ポップ/ロックの「ザ・ハンター



1」という聴き慣れた2枚を中心に試聴した。最初はメラクスのSCENIOL1である。SA17S1のディスプレイ表示はOFF。プリアンプのボリューム位置は3である。「DGG」の1曲目を途中まで聴いて一時中断。柔らかめの質感で、予想していたより穏やかすぎる音なのである。そこで、シグネチャ805のケーブル接続を低域側から高域側に変えてみた。さすがに敏感なスピーカーらしく、これだけで音の表情はかなり変る。ディテールの濃やかさがアップし、音のエッジもはっきりしてきた。試聴を再開してから数曲を聴いた限りでは、肌触りの滑らかな質感で、大人びた上質さが持ち味らしい。ここではさらに細部まで鮮明な描写力とソリッドな音像が欲しい。例えば、「ザ・ハンター」の10曲目は、冒頭の連打するドラムスの輪郭が太筆のペンで描いた柔らかさがあり、強弱の対比をもう少し高めたい。全体に自然な拡がりを感じさせる音場空間が本機の魅力に思えるが、ドライヴ感

FLYING MOLE



VICTOR

SUB WOOFER ビクター SX-DW7

¥135,000

●型式:パワーアンプ内蔵サブウー
ファー●使用ユニット:30cmコーン型●
感度:88dB/W/m●内蔵パワーアンプ
出力:600W●入力インピーダンス:22k
Ω(Low-level)、440Ω(High-level)●クロ
スオーバー周波数:40~120Hz(連続可
変)●レベル調整:連続可変●寸法/
重量:W390×H390×D446.5mm/
2.5kg●問合せ先:日本ビクター(株)お客
様ご相談センター☎03(5684)9311

伝える高域の反応の良さが身上のようだが、「ザ・ハンター」の9曲目などでボトムエンドの制動力不足がわずかに感じられた。「DGG」で聴くミッシェル・マイスキのチェロは緻密な描写で印象的なのだが、オーケストラの演奏で音量を上げた時に、シグネチュア805の低域をコントロールしきれないような振る舞いなのだ。音の質感表現は第一級のクオリティであるのだが……。

や色彩的な鮮やかさが甘く、総じてまともな感を重視した消極的な表現になっている。
次にステラヴォックスのPWIを試す。さきほどのメラクスよりも明らかにゲインが高く、プリアンプのポリウム位置は2.5。スピーカー端子の接続を低域側にすることで音調バランスが整う。さすがに小型の録音用モニターアンプとしても使われるだけあって、無駄な音を出さずに一音一音を克明に描いていく。音の純度が高くスピード感に優れた現代的な音である。ハイブリッドSACD「オータム・イン・シアトル」で聴く、山本剛のピアノの存在感を鋭く訴えかける力量は並々ならぬもの。音像のエッジを丸めずに

本誌初登場となるフライングモールのDAD・M1は、PWM(パルス幅変調)によるデジタル増幅アンプ。プリアンプのポリウム位置は再び3。スピーカーケーブルの接続は高域側端子にした。極細の電源ケーブルや音質的に不要と思われる入力アッテネーター、小さいスピーカー端子など気になるところがあるが、音を出した瞬間、私は自分の耳を疑った。驚くほどの瞬発力と圧倒的な分解能、高い制動力とともに切れ込み鋭くリズムを刻んでいく……。しかも、一部のデジタル増幅アンプに感じられたような、よそよそしさのある分析的な表情とは無縁の、暖かみのあるヴィヴィッドな表現だ。ある種の凄味を感じさせたPWIと比

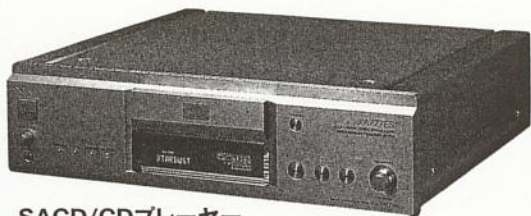
べると、DMD・M1のほうが低域までスピード感が整っており、シグネチュア805をコントロールしきって一瞬のスキも許さない高密度の音に仕上げている。決して表面だけをなぞるのではない、開放的で熱気を感じさせる演奏を展開するのである。

なかでも印象的だったのは「DGG」のディスク。ギル・シヤムが弾くヴァイオリン・ソロの清冽でリアルな存在感と、後方で伴奏を弾き続ける弦楽器群の克明なコントラストは圧巻。音量をグッと抑えて弾く伴奏が曖昧な音にならず、精密かつリズムカルに旋律を刻んでいく。「ザ・ハンター」8曲目の強烈な低音エネルギーにもまったく怯まないし、音像のエッジを自然に際立たせる彫りの深い立体感を感じていて気持ちがいい。サイズと価格にびっくりするが、私はなによりも音の完成度に惹かれてしまった。しばらく他のディスクを聴きながら、音の可能性を探求する目的で電源ケーブルを頼りない付属品からオヤイデ電気の上/i15dpcに交換したところ、良質の電源ケーブルらしい効果が加わってローエンドの押し出し感とスタビリティがいちだんと高まった。言うまでもなく、パワーアンプはDAD・M1に決定。

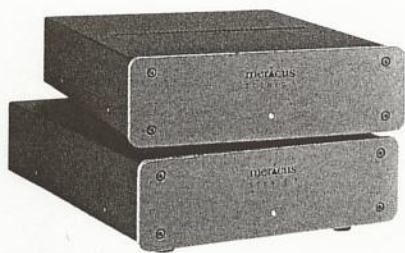
ラックをタオックに換え、 ベースが締まりのある音に

以上、基本システムが決まったところで、オーディオラックを交換した。試聴室に常設してある2台のADK(朝日木材加工製)から、別売りのスパイクを装着したタオックのHT3(1台)に交換。HT3は左サイドにセットし、私とスピーカーの間にはなにも置かない。ガタがないことを確かめたうえで、上段にプレーヤー、中段はプリアンプだ(下段は未使用)。4台のDAD・M1はウッドブロックの上に置いた状態で

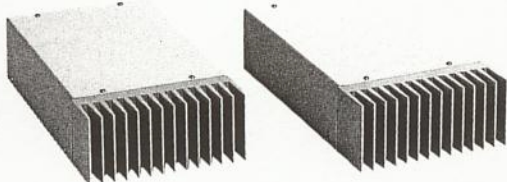
その他の試聴モデル



SACD/CDプレーヤー
ソニー **SCD-XA777ES** ¥310,000
●問合せ先:ソニー(株)お客様相談センター ☎0570-00-3311



パワーアンプ
メラクス **Scenio 1** ¥276,000(ペア)
●問合せ先:(株)アプサートロン ☎0424(67)0541



パワーアンプ
ステラヴォックス **PW1** ¥500,000(ペア)
●問合せ先:ステラヴォックスジャパン(株) ☎03(3958)9333



サブウーファー
B&W **ASW CDM** ¥228,000
●問合せ先:日本マランツ(株)
お客様相談センター ☎03(3719)3481

ある。ラックを換えたのは、収納環境が音に与える影響が少なくないから。棚板に MDF を採用した HT3 は、重厚な同社 SS シリーズとは異なる音の明瞭さが持ち味。指で叩いてみると、天然ラバーウッド(ゴムの木)の ADK よりも硬い感触が得られる。

ラックを換えただけで、「オートム・イン・シアトル」のウッドベースから付帯音が減って、締まりのある音になった。シンバルレガートの音も芯がクッキリして、あとに続く倍音成分が豊かに聴こえてくる。これはいい。マルチチャンネルで聴くハイブリッド SACD 「LAGQ」は、音場空間の透明感が高まって全体の見通しが変わりながらも改善された。アコースティックギターのアタックが明瞭になり、4人の楽器の音色の違いを的確に描くのだ。演奏全体のダイナミック感も増したようである。

これから先は、市販のアクセサリとスピーカーケーブルを使ったチューニングである。一部に高額な製

品を使っているが、なるべく効果的で安価なアイテムを選んだつもりだ。自分のオーディオ環境では、アクセサリ類を導入する前に、スピーカーのクリティカルな位置関係の調整や各機器の接点クリーニング、アンプやプレーヤーなどの置き方に関する工夫をじっくり時間をかけて行なっている。アクセサリに投資する前に、まずは自分で汗を流して試行錯誤してみる。それがチューニングのノウハウとなって蓄積するのである。

リラクサ3プラスによる音の改善効果は凄い……

この状態では、スピーカーの後方まで深く拡がる音場感がまったくもって物足りない。そこで、話題の磁気フローティングボード、リラクサ3プラスを SA17S1 に使ってみたところ、これが大正解。音場の立体的な拡がり感や分解能が大幅に改善されたのである。

特に、ハイブリッド SACD の「ドヴォルザーク…交響曲第9番(新世界より)」は、幾重にも織り重なったアコースティック楽器の音が混濁することなく見事な分解能で丁寧な描かれる。この驚きはステレオ再生よりも空間情報の豊かなマルチチャンネルのほうがより感動的。立体的に、空間に楽器がピシッと定位している。実はその前に「J」プロジェクトの SP35H(樹脂製コーンスパイク)を4個、SA17S1 に挿入してみたのだが、これはミスマッチ。ハイブリッド SACD 「狂気/ピンク・フロイド」は、個々の音がクッキリしたが、音場の雰囲気は堅苦しくなり、天井が低い空間に感じられたのだ。それにしても、リラクサ3プラスによる音の改善効果は凄い……。

オーディオ機器の設置に関するチューニングは、振動伝達による悪影響を重量物などで抑えこむか、あるいはフローティングで遮断するという手法に大別できる。後者はアナログプレーヤーが代表例であるが、光

学ディスクを読むデジタル・プレーヤーにも絶大な効果を発揮するというのが興味深い。精密なDAC回路が不要振動から開放されるだけでなく、回転機構の制御回路やビックアップの読み取り精度に余計なストレスや負荷が加わらないのだろう。

こうなると欲が出てくる。広大な音場感を手中に収めたので、この状態から音の芯を明確化するために、プレーヤーでは成功しなかったスパイク接地をリアンプに実践してみる。ここでは樹脂とステンレスを組み合わせた構造のJープロジェクトSP35HB(コーンスパイク)とBA35HB(スパイクベース)を使う。この効果は、ハイブリッドSACD「マイ・ライフ」のピアノでよく判る。コツンという硬質なハンマーのタッチが、より鮮明に浮き出してくる。「ザ・ハンター」の1曲目も、クラベス(パーカッションの一種)の乾いた木の響きにメリハリが出てくる。さらに、TA・P900ESとSA17S1のボンネットの共振を抑制するために、アイクマン(オーストラリア)のTOPPERという金属製スタビライザーを3個ずつ天板部分に置くことにした。

スピーカーケーブルの交換で 音場空間が軽く濃密な佇まいに

ケーブルによる音の違いは大きい。だが、私の場合は音の変化をすぐに聴きとれても、じっくり時間をかけて聴かなければ「好きか嫌いか」という深層領域まで達することができない。そういう理由から、ここでは軽い気持ちで見ず知らずのケーブルを試すというわけにはいかない。

スピーカーケーブルは直接音・間接音だけでなく、前後・左右・高さという音場感を大きく支配する。ここではカルダスのクロスリンク1S(6m×4本)を

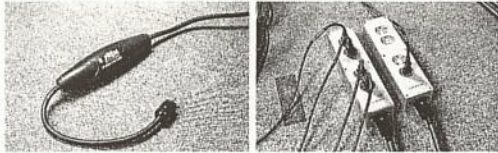


組合せ機器を選択するための試聴をした時の基本セッティング状態。4本のスピーカーはリスニング位置から約220cmの距離でITU-Rの勧告に完全準拠した配置とし、サブウーファーは暫定的に右横にセット。ラックは左横に2台並べ、上段にSACDプレーヤーとプリアンプを並べた。またパワーアンプはラック後方のウッドブロックに設置。各機器へのAC電源供給は、SACDプレーヤーとプリアンプは別系統の壁コンセントから、4台のモノラルパワーアンプはCSEのタップを介して行なっている。

使う。安価な部類で大袈裟すぎない良品である。クロスリンク1Sにしたとたん、マルチチャンネル再生の音場空間がフワッと軽く、そして濃密な佇まいになった。決して音が弱々しくなったのではない。微小レベルの音情報の再現性が高まったのである。細身のケーブルなので叩きつけるような逞しいソリッド感はある望めないが、音の品位は間違いなく向上している。「LAGQ」のアコースティックギターによるスリリングなインタージェイが、リアリティたっぷりに愉しめるようになった。

締めくくりは電源周りとスタンドの確認。リラクサ3プラスのフローティング機構に注意しながら、SA17S1の電源ケーブルをアイクマン製エクスペレス・パワーに換える。この音の変化にはびっくりした。音数がグッと増えて、音に逞しさが漲ってくる。しかも鮮やかな音色になるといって、良いことづくめの変貌ぶり。「マイ・ライフ」は、彼女の歌声のダイナミックな抑揚を微塵もスポイルすることなく、鋼のような力強さで聴かせるのだ。ついでに電源供給に使っていたCSEのコンセントボックスを同社L30R(電源ケーブル)とアコースティック・リヴァイブ製のコンセントボックスRPT4に交換。暗騒音レベルでの音場の静けさが確実に高まっていく。

最後に、シグネチュア805に使っていたRSS604(4本支柱)を、2本支柱のRSS602に換えてみた。低域の量感が微量ながら増加し、緊張感から開放されたように音楽がより自然に鳴ってくる。なるほど、スタンドは重ければいいというわけではない。それに気を良くして4本すべてを高価なRSS805にしてみたが、音質的な変化はそれほど強く感じなかった。しかしながら、デザイン的な統一感が素晴らしいので、ルックス優先で選んでしまった……。



電源供給系の調整

左はマランツSA17S1に使用した電源ケーブルのアイクマンeXpress Power(¥40,000)で、これを壁コンセントにつないで給電。右はソニーTA-P9000ESと4台のフライングモールドAD-M1への給電用として使用したアコースティック・リヴァイヴの電源タップRPT4(¥48,000/1台)とCSEの電源ケーブルL30R/2M(¥49,000/1本)。また、フライングモールドAD-M1にはメガネ型プラグの電源ケーブルが付属するが、これをオヤイデ電気のメガネ型プラグ付電源ケーブルL15 dpc(¥9,500/1本)に交換した。

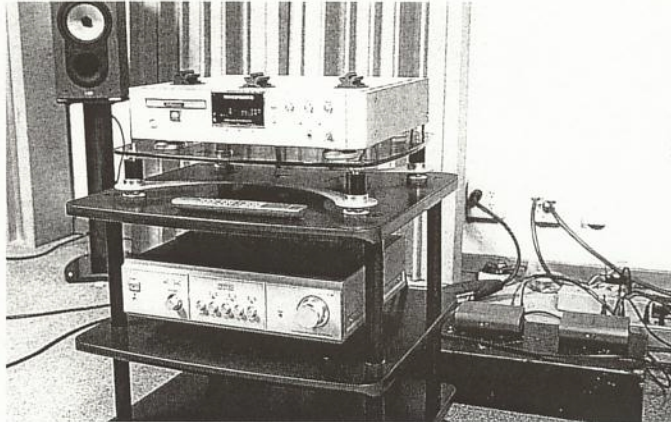
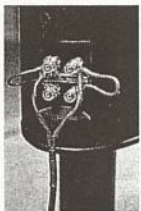
スピーカースタンドの選択

B&W Signature805用のスタンドはアコースティック・リヴァイヴの3モデルを比較。汎用型の4本脚タイプRSS604(¥114,000/ペア)と2本脚タイプRSS602(¥84,000/ペア)、さらにSignature805およびNautilus805専用機として開発された写真のRSS805(¥190,000/ペア)。今回の試聴では、RSS602とRSS805の2モデルに大きな傾向の違いはなく、本スピーカーのユーザーはデザインとコストのどちらを優先するかで選択すればよいだろう。



スピーカーケーブルの交換

計4chぶんのスピーカーケーブルをオーディオクラフトSLX50(¥2,600/1m)からカルダスCrosslink 1S(¥3,600/1m)に交換すると、ローレベルの情報量が豊富になり、繊細な音の表情を克明に再現するようになった。一般的に言って、スタンドやインシュレーターの交換、置き場所の変更による音の変化はすぐに判断がつくが、電気信号が流れるケーブルの場合は、特に新品の状態では時間経過とともに音が変わっていく場合があるので、本来はある程度の時間を掛けて判断する必要があるだろう。

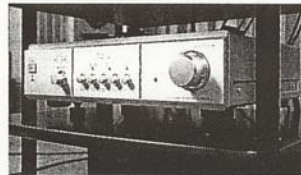


オーディオラックの交換

2台のADK製ラックの代わりにタオックHT3をスパイク(オプション)を取り付けて設置。上段にマランツSA17S1を置き、中段にソニーTA-P9000ESを収納した。HTシリーズは棚板にMDF、支柱にグラデーション鋳鉄を採用するオーディオ・ビジュアル機器用ラックで、HT3をはじめとする標準仕様(5種類)のほかに、棚板(3種類)と支柱(6種類)が単品販売されており、試聴環境に合わせたカスタマイズも可能。

SACDプレーヤーのセッティング

マランツSA17S1をイタリアSAPのフローティングボードRelaxa3 Plus(¥110,000)に載せ、さらに天板の共振をコントロールするために、アイクマンのスタビライザーTopper(¥10,000/6個一組)を3個並べた。アナログプレーヤーと同様、回転系メカを搭載するデジタルディスクプレーヤーは、脚回りのセッティングによる音の変化が比較的大きく現われる機器。自分の求める音の方向性に合わせて、フローティングするべきか、インシュレーターなどで設置するべきか、あるいは敢えて何もしないかを判断する必要があるだろう。



プリアンプの設置

ラック中段のソニーTA-P9000ESは、J1プロジェクトのコーン型ハード系インシュレーターSP35HB(¥16,000/4個一組)とスパイクベースBA35HB(¥13,200/4個一組)を組み合わせて4点設置。また、マランツSA17S1と同様に、天板にアイクマンTopperを3個並べて“鳴き”をコントロールした。

悪くはない。

最後に、私はDAD・M1を2台ずつ使うバイアンブ駆動によるステレオ再生を試した。果たして、その効果は絶大である。ドライブ能力が飛躍的に高まり、余裕に満ちた壮大な音世界が待ちかまえている。複雑なりズムも闊達に刻み込み、厚みのある堂々とした音像描写は鮮烈だった。バイアンブ駆動にはケーブル周りの工夫が必要だが、DAD・M1のプライスタグを考えると、全チャンネルをバイアンブ対応にするのも悪くはない。

バイアンブ駆動による効果は絶大

与えられた時間をすべて使って、できる限り音を追求めてみた。最終的な音は、自分の予想を遙かに超える満足度である。しかし、パーフェクトではない。ラインケーブルの交換もしたかったし、スピーカーケーブルを短くした場合の音の変化も知っておきたかった。また、サブウーファーは音を比べてビクターを選んだのだが、試聴ディスクはサブウーファー領域を積極的に使ったものではなかった。したがって、SX・DW7の音質を言及するには至っていない……。

試聴 ディスク

- ザ・ハンター / ジェニファー・ウォーゼン
(BMGファンハウスBVCP7442)CD
- ステレオサウンド・リファレンス・レコードVol.10
(ステレオサウンド)CD
- オータム・イン・シアトル / 山本 剛トリオ
(FIM SACD040)SACD2ch/CD
- LAGQ:Latin / Los Angeles Guitar Quartet
(TELARC SACD60593)SACDマルチch&2ch/CD
- ドヴォルザーク:交響曲第9番《新世界より》他
イヴァン・フィッシャー指揮ブダペスト祝祭管弦楽団
(フィリップスUCGP7004)SACDマルチch&2ch/CD
- 狂気 / ピンク・フロイド
(東芝EMI TOGP15001)SACDマルチch&2ch/CD
- MY LIFE / 綾戸智絵
(ewe EWSA0051)SACD2ch/CD